

# 平島公方と阿波の歴史を考える



エスシー企画(株)

山本 秀樹

yamamoto hideki

技術士 (建設部門)

## 1 はじめに

室町幕府を開いた足利尊氏の末裔である平島公方(阿波公方)が、天文3年(1534年)より文化2年(1806年)までの約270年間、九代にわたり阿南市那賀川町古津に在住していたことはあまり知られていない。これは明治、大正、昭和の戦前まで、学校教育において「足利尊氏は逆賊」との汚名を着せられていたからである。南北朝時代には57年間にわたり吉野と京都に二つの朝廷があり、それぞれに天皇がいた。しかし、明治時代になって桂太郎内閣は天皇の勅裁をあおぎ、南朝を正統と定め北朝の歴代天皇は歴代表から削除させた。南朝の後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒して王政を復興し、吉野の山奥に幽閉されても足利尊氏と戦った英遇・勇敢な天皇とされ、南朝側の武将、楠木正成、新田義貞なども建武中興の忠臣として顕彰された。他方、足利尊氏は北朝というかいらい天皇を立てて征夷大將軍となり、室町幕府を興した極悪非道な人物とされたのである。そのため、足利一族は逆賊として世間から罵倒され、史実さえ正しく伝えることが禁じられた。阿波公方もその被害者である。しかし、戦後になって日本歴史は見直され、足利尊氏の評価は変わり、阿波公方の存在にも関心が高まった。公方関係の墓地、屋敷跡、その他の史跡や記録も保存されることになった。阿南市那賀川町赤池の西光寺には平島公方歴代の墓が残されている。同町古津にあった平島公方屋敷跡には旧那賀川町教育委員会によって「公方屋敷跡」の標識が建てられている。その西側の公方館があったとされる場所には歴史民俗資料館が建設され、全国で唯一の足利氏関係の資料展示場となっている。昭和62年には中島源著の「平島公方物語」も発刊され、歴史に興味ある市民への参考資料となっている。そこで平島公方の誕生から阿波退去までの歴史を明らかにし、その存在意義を考えてみたい。

## 2 足利家と室町幕府

足利家は清和源氏の末裔で先祖は八幡太郎源義家の次男義国である。義国は京都に居住していたが部下の不始末により関東に下った。その長男義重は上野の新田庄(現在の群馬県太田市付近)を、次男義康は下野の足利庄(現在の栃木県足利市付近)を本拠地とし、それぞれ関東各地に勢力をもつ豪族となった。平家討伐を目指した源頼朝が各地の豪族を招聘した際、長男義重は招きに応じず頼朝の怒りを買って鎌倉幕府から冷遇を受けるが、次男義康は鎌倉幕府に帰属し、執権北条家と姻戚関係にもなった。足利尊氏は義康の八代

目にあたり、初めは鎌倉幕府の執権北条高時の一字をもらって高氏たかうじといった。なお、南朝の忠臣とされた新田義貞は義重の子孫である。

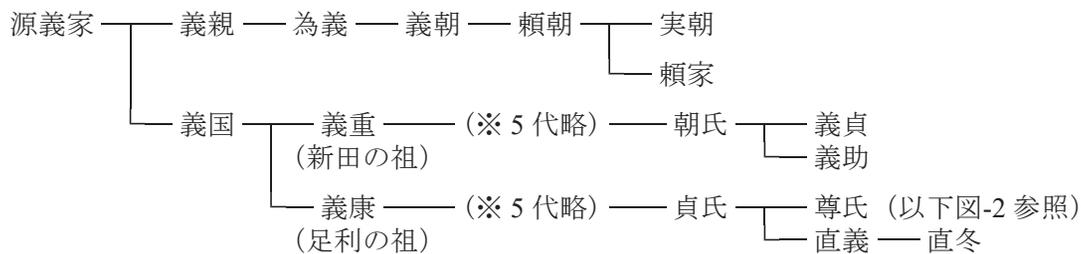


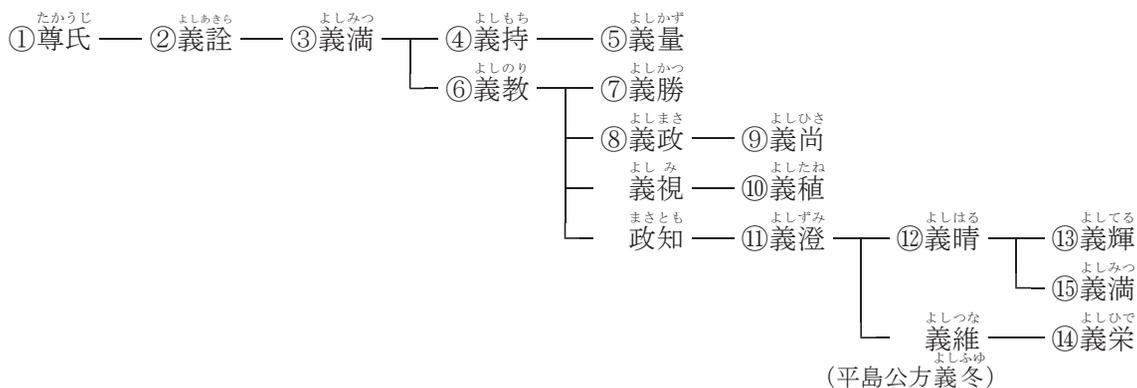
図-1 足利氏系図

元弘元年（1331年）、後継者争いにより鎌倉幕府から讓位を迫られた後醍醐天皇は、倒幕計画を進めるが発覚し、囚われの身となる。これが「元弘の乱」である。翌年、天皇は隠岐の島に流されるが一年後に脱出する。天皇は名和長年に守られ、伯耆（現在の鳥取県）の船上山を行在所と定めて、ここから諸国に朝敵退散の宣旨を出す。これを知った鎌倉幕府は、関東の足利高氏に船上山討伐の出陣を命じる。高氏は出陣するが、幕府に対し不満を持っていたため、途中の三河において反旗を翻す決意をする。ひそかに後醍醐天皇の綸旨をいただき、北条方に不満を持つ諸国の守護や豪族に勅命を伝えて兵を募り、丹波から京都に攻め入って六波羅を攻め落とす。一方、鎌倉においても新田義貞の挙兵により執権北条高時以下の幕府軍は打ち破られ、遂に鎌倉幕府は終りを迎える。後醍醐天皇は京都に帰り、光厳天皇を廃し年号ももとの元弘に復させる。足利高氏は幕府討伐の功により武蔵、上総の守護職など北条一族から没収した土地を与えられた。名前も後醍醐天皇の御名、尊治の一字をいただき尊氏と改名した。

建武元年（1334年）、後醍醐天皇はかねて意図していたとおり、武家の手から政権を取り戻して天皇親政の政治体制を執ることとした。これが「建武の中興」である。しかし、この新制も朝廷本意、公家貴族優先、武士軽視のため反発を招き、武家政治復活への道をたどる結果になる。「建武の中興」を明治・大正の御用学者は「皇政復興」として高く評価したが、戦後の学者は、時代に逆行し専制的な姿勢で対処しようとした失敗であると評している。

中央での新政に対し地方では不満が募り、北条の残党による反乱が起きる。北条高時の子時行が兵を挙げ、足利尊氏の弟直義が守る鎌倉に攻め入った。逃れ出た直義を助けるため、足利尊氏は自ら兵を率いて北条追討のため鎌倉へ向かう。これを知った諸国の武士は競って尊氏の軍に加わり、瞬く間に鎌倉のみならず関東全域を平定してしまう。尊氏はそのまま鎌倉にとどまったため、朝廷は尊氏に謀反の志ありとして新田義貞を討伐軍として鎌倉に送る。尊氏はこれを打ち破り、逆に京都へ攻め上がるが、一度は破れて九州へ落ち延びる。その後、再び攻め上がり兵庫で新田義貞の軍を撃破する。この時、楠木正成は湊川の戦いで討死にする。敗れた新田義貞は後醍醐天皇を奉じて比叡山に逃れる。尊氏は光

厳上皇の弟を北朝二代目光明天皇にたてる。両者の争いは続いたが、やがて尊氏は後醍醐天皇に和議を乞い、京都に帰ってもらう。天皇に見捨てられた新田義貞は北陸へ落ちるが、尊氏の大軍に攻められて一生を閉じる。一方、後醍醐天皇は武家の指図には従わぬ姿勢を貫き、建武 3 年(1336 年)、ひそかに吉野に逃れたため、足利尊氏と後醍醐天皇は断絶状態となる。ここに、後醍醐天皇の吉野朝廷(南朝)と、京都の光明天皇(北朝)が並立したのである。両朝対立は南朝が四代、北朝は五代続き、後小松天皇の両朝合併まで 57 年間続いた。この間の和暦も南朝・北朝それぞれに元号があった。建武 4 年(北朝)・延元 2 年(南朝)(1337 年)、尊氏は光明天皇から征夷大將軍に任ぜられ、足利幕府が成立する。後に三代將軍足利義満が京都室町に移ってからは室町幕府と呼ばれるようになった。その年、後醍醐天皇は病で崩御されたため、尊氏が天皇の供養のため京都の嵯峨に建立したのが天龍寺である。



図一 2 足利將軍系図 (数字は將軍歴代)

### 3 応仁の乱

応仁の乱とは、応仁元年(1464 年)から 11 年間にわたり京都の町を二分した戦乱のことである。室町幕府には執事的な立場の管領職があり、將軍の補佐だけでなく政務を統括していた。管領は足利家の重臣である細川、畠山、斯波の 3 家から任ぜられた。当時の管領は細川勝元だったが、勝元の岳父で幕府の実力者だった山名持豊(宗全)と権勢を争っていた。8 代將軍足利義政にはなかなか男子が生まれなかった。そこで跡継ぎを弟の義視に定めるが、その直後、妻富子に長男が誕生する。富子は我が子を將軍とするため、山名持豊に後ろ盾を頼む。他方、義視は自身の地位を守るため中央で主導権を持つ細川勝元を頼った。これに畠山、斯波両家の家督争いが絡んできた。山名は畠山義就や斯波義廉らを、細川は畠山政長や斯波義敏らをそれぞれ味方につけた。両者は東西に別れ、幕府を二分する戦乱が始まる。この戦いは市街戦だったため京都の町は荒れ果て、幕府のあった北部地帯はほとんど灰燼に帰した。市民は食糧難となり、略奪や強盗が横行した。戦火は市外地にも及び、諸国でも各地の守護職は両派に分かれて争乱となった。文明 5 年(1473 年)、山名持豊と細川勝元の両雄が相次いで世を去り、戦乱はひとまず幕を閉じる。しかし、將軍の權威は失墜し、諸国の武士達は將軍の命令に服しなくなった。

京都での戦乱が収まるや、富子は強引に長男義尚よしひさを9歳で元服させ將軍につかせる。義政は僧となり、銀閣で有名な東山山荘で風流三昧の生活をする。実権を握った富子は、幕政に関与し数々の悪行を働く。將軍義尚が25歳で世を去ると、將軍職を争った義視よしとみが、我が子義植よしたねを連れて上洛する。富子とも和解し、義植を將軍に立てようとするが、僧となっていた義政は、弟である伊豆の堀越公方政知まさともの次男義澄よしずみを擁立しようとして反対し、自ら再び將軍となる。延徳2年(1490年)義政は死去し、10代將軍は義植となった。



写真-1 応仁の乱(図説 日本文化の歴史6)

#### 4 管領細川の分裂

細川氏の先祖は足利氏と同じ源義家であり、義家から6代のちの義季が細川氏初代である。細川氏は足利一門では隋一の守護大名であり、代々管領として幕政に関与してきた。守護国も讃岐、阿波、土佐、丹波、摂津、和泉といった経済的にも軍事的にも重要な地域であった。代々秀でた人材を輩出し、応仁の乱などにおいても一門は結束して戦ってきた。しかし、12代目の細川勝元が亡くなると細川一門は分裂を起す。勝元の嫡男政元は義植の將軍就任に不満であった。政元は將軍義植が自ら兵を率いて河内の畠山義豊の討伐に出かけた際、クーデターを決行する。政元は足利義澄よしずみを自分の屋敷に迎えて11代將軍に据え、自らも管領となる。將軍となった義澄は阿波の守護である細川成之しげゆきの娘(青雲院)を妻(側室)に迎える。

そもそも、阿波の細川は建武元年(1334年)、足利尊氏の重臣細川和氏が阿波の平坦部を平定し、板野郡土成町(現在の阿波市土成)の秋月城に入り、阿波の守護となったのが始まりである。和氏は南朝を支持する三好・美馬の山岳武士の抵抗により阿波全域を治めることは出来なかったが、建武4年(北朝)・延元2年(南朝)(1337年)、和氏の弟頼晴が山岳武士を討伐して阿波全域を平定した。四国管領となった頼晴は、貞治2年(北朝)・正平17年(南朝)(1363年)に勝瑞(現在の板野郡藍住町)に居城(勝瑞館)を構え、阿波の細川初代となった。阿波の細川は宗家に次ぐ権門であり、一族中隋一の権勢を有していた。青雲院の父親である細川成之は、阿波の細川7代目にあたる。成之は娘婿のため大兵を河内に送り、義植を捕らえて京都の竜安寺に幽閉する。義植は風雨に紛れ京都を抜け出し、越中、伊予を経て周防の豪族大内義興よしおきのもとに逃れた。

一方、宗家の細川政元は独身を貫いたため後継者がいなかった。そこで関白だった九条家から養子(澄之)すみゆきをもらい受け、丹波の守護職にした。ところがその後、阿波の細川からも養子(澄元)すみもとをもらい受け、こちらを管領家の後継者に決定したため、細川一門は澄之、澄元すみもとの二派に別れて抗争となる。これに和泉の守護であった細川政春の子、高国たかくにが管領家継承者に割り込んで来たため、複雑な事態となる。

永正 3 年(1506 年)、細川澄元は家臣、三好之長ゆきな（のちの長輝）を主将とする阿波の軍兵を率いて上京する。三好氏の先祖は足利氏や細川氏と同じ源氏であり、源義家の弟義光の支流である小笠原氏の末流で、阿波の三好郡三野町（現在の三好市）芝生に住んでいたため、「三好」と称した。細川が阿波の守護になると三好はその家臣となり、以後、足利幕府に事あるたびに阿波の将兵を率いて京都や畿内に出兵する。永正 4 年(1507 年)、細川宗家の重臣達は相図って主人政元を暗殺する。さらに細川澄元も殺そうとしたが、三好之長は澄元を守って近江に落ちる。そして、再び京都に攻め上がり、丹波から京都に入った細川澄之を討ち取った。細川澄元は將軍足利義澄から管領家の家督継承を受ける。これにより、京都は澄元の天下となり、その家臣である三好之長が実質的な支配者となった。これ以降、約 100 年の間、「阿波」の三好氏が 5 代にわたり中央で活躍するのである。



三好長輝（之長）像【見性寺蔵】

写真-2 三好之長の画像

一方、逃亡先の周防で細川政元と澄之の死を知った足利義植は、大内義興に支援を求め、周辺の諸大名も加えながら京都へ攻め上る。この宗家の紛争に対し、和泉の細川高国は義植側が形勢有利と判断し、兵を起して澄元を討つべく京都に攻め入った。細川澄元と三好之長は將軍義澄とともに京都を脱出し、近江に逃げ落ちる。永正 5 年(1508 年)、足利義澄は將軍職を解かれ、義植は再び將軍となった。細川高国は管領となり、上洛に功績のあった大内義興は管領代となった。

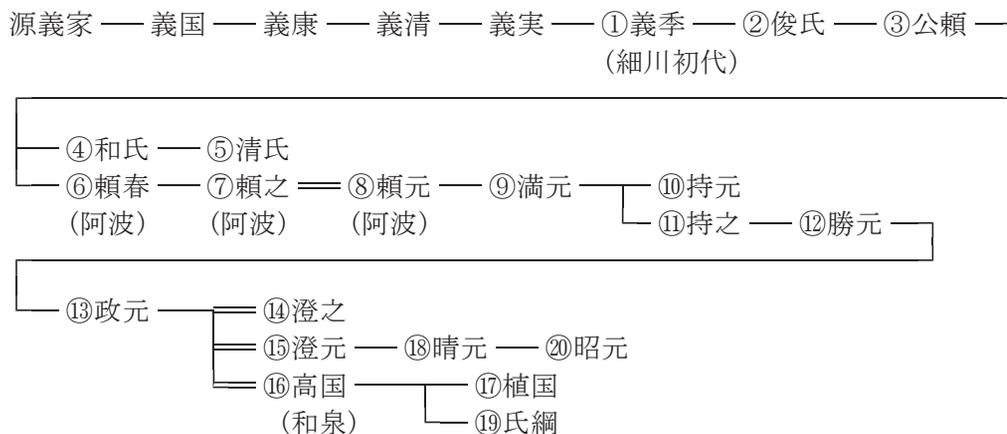


図-3 細川宗家略系図 (※ — 線は養子)

### 5 平島公方の生誕

11 代將軍足利義澄が近江に逃れた翌年の永正 6 年(1509 年)、側室の青雲院に男子よしつな(義維)が誕生する。のちに平島公方となる足利義冬である。永正 8 年(1511 年)には正室にも男子よしほるが生まれた。のちの 12 代將軍足利義晴である。中央では 10 代將軍足利義植を擁立する

細川高国と、11代将軍足利義澄を擁立する細川澄元の間で、京都争奪を巡る戦乱が始まる。これを両細川の乱という。永正8年(1511年)、阿波にいた細川澄元は、精兵を率いて堺に到着、和泉の細川政賢まさかたと連合して再び京都を目指した。戦いを不利と見た細川高国と大内義興の連合軍は、将軍足利義植とともに丹波に逃れる。澄元軍は京都に入るが、その2日前に足利義澄は病で亡くなる。丹波に退いていた高国軍は体制を整え、京都に出撃してくる。大内義興は京都の北、舟岡山に陣取る細川澄元勢に夜襲をかけ、細川政賢は戦死、澄元は摂津に敗走する。これが舟岡山の合戦である。勝利した足利義植は入京し、三度目の将軍の座に着く。これ以降7年間、京都は平和が保たれる。

永正15年(1518年)、管領代の大内義興が、長年にわたる軍資の消耗等のため周防に帰国する。そのため京都の軍備は弱体化し、再び細川高国と細川澄元の対立が始まる。阿波にいた細川澄元は家宰の三好之長とともに兵庫に出兵する。澄元は摂津の伊丹城で待機し、之長が京都に進出する。不利と見た細川高国はいったん近江に逃れるが、再び大軍を率いて京都に攻め入る。少人数の四国勢は敗れ、三好之長は捕らわれて処刑される。これを知った澄元は、やむなく阿波の勝瑞城に引き上げるが、まもなく病で亡くなる。高国は細川の宗家を継ぐが、次第に専横の振る舞いが多くなる。高国は将軍義植を追放し、義晴を12代将軍に据える。

足利義植よしたねには嫡子がいなかったため、細川氏に保護されていた足利義維よしつなを養子とする。大永元年(1521年)、義植は養子義維を伴ってひそかに都を抜け、堺を経て淡路の沼島に隠れ住む。さらに大永3年(1523年)、義植は沼島を立ち、阿波の細川氏に高国追討の援助を依頼する。しかし、亡き細川澄元の子はるもと(のちの晴元)はまだ幼児だったため、その願いはかなわなかった。この年、義植は撫養(現在の鳴門市撫養町)で流浪の生涯を終える。亡骸は撫養の岡崎山に葬られ、塚が建てられた。現在、鳴門市岡崎山に残る将軍塚が義植の墓だと伝えられている。足利義維よしつなは義植の遺言に従い、母の出里である阿波の勝瑞城に引き取られ、細川澄元の嫡子、晴元とともに育てられる。阿波の守護細川持隆もちたかは、義維を足利家直系として将軍につかせ、晴元に細川の宗家を継がせて管領となることを望みとした。家宰の三好一族も、之長の仇敵細川高国を討つべく孫の元長もとなが(嫡子長秀は之長より先に敗死)の成長を待った。

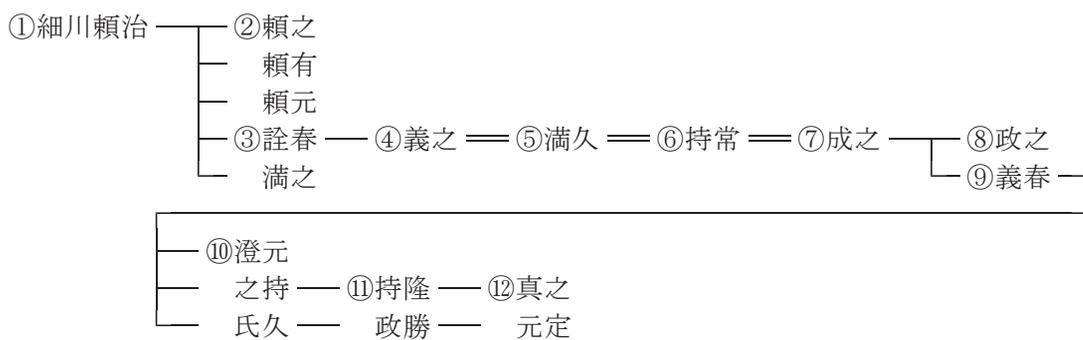


図-4 阿波細川系図 (※ 〓線は養子)

## 6 足利義維の京都進攻、淡路から阿波へ

京都では 12 代将軍足利義晴の管領となった細川高国が幕政を取り仕切っていた。しかし、高国のために戦功のあった香西元盛が謀殺されたことがきっかけとなり、阿波の細川持隆は三好之長の弟勝長を主将として将兵を京都に差し向ける。大永 7 年(1527 年)、三好勝長率いる阿波勢と香西一族が率いる丹波勢は、桂川原で高国勢と大合戦となった。勝長は負傷（のち戦死）するが高国勢を打ち破る。大敗した高国は将軍義晴を奉じて近江の坂本に逃れ、阿波勢は京都に入った。阿波の勝瑞城では足利義維が 17 歳、宗家細川澄元の子晴元が 14 歳、三好元長は 25 歳になっていた。戦勝が伝わると、足利義維を総大将、三好元長を侍大将とする阿波の大軍を編成し、高国討伐に攻め上ることとなった。義維はまず和歌山に上陸し、畿内の情勢を探るため、紀ノ川河口にあった海善寺に滞在した。三好元長は堺に上陸し、義維と晴元を進駐させた。続いて、元長は尼崎に渡り伊丹城を囲むが攻めあぐむ。その隙に高国は大軍を率いて京都に入り、各所に陣取りして阿波勢が攻めてくるのを待った。これを知った元長は伊丹城の囲みを解き、京都へ攻め上がる。京都では両軍による激しい攻防が繰り返されるが、やがて双方とも対峙したまま打つて出なくなった。足利義維と細川晴元も一度は京都まで攻め入ったが、戦さの厳しさを知って再び堺まで引き返している。年が明け大永 8 年(1528 年)、細川高国と細川晴元の間で和睦が成立し、両者は人質を交わして戦さは終了する。すると摂津、伊丹の諸将が義維に味方し、不利となった高国は兵をまとめて近江の坂本に逃れ、将軍義晴も近江の朽木に去った。

将軍、管領が不在となった京都では、三好元長が堺にいる義維の代理として実権を握る。その後、足利義維は再び細川晴元と三好元長に守られ都に入る。しかし、京都では晴元と元長の仲が次第に悪くなり、義維は将軍職に就けなかった。享禄 2 年(1529 年)、遂に三好元長が阿波に引き揚げたため、細川一族の高国と晴元の争いは高国が優勢となった。足利義維は三好元長に救援を求め、享禄 4 年(1530 年)再び堺に出陣した元長軍は天王寺の決戦で高国軍に勝利する。捕らえられた高国は自刃させられる。細川晴元は細川宗家を継ぎ、将軍義晴を近江から京都に迎えて自らは管領となった。三好元長も戦功により幕政に加わるが、元長と不仲だった晴元は、本願寺勢を使い元長を討つよう仕向ける。元長は出家して晴元に詫言を入れるが受け入れてもらえなかったため、義維を奉じて堺に立てこもって抵抗する。

享禄 5 年(1532 年)、本願寺門徒衆は大挙して堺に攻め寄せ、内通者が出たこともあって、元長は壮絶な自害をして果てる。一方、細川晴元は勢力を示した門徒衆に不安を感じ、法華衆徒と対立させることを画策した。これに激怒した門徒衆は、天文 2 年(1533 年)堺の足利義維のもとにいた細川晴元を攻め、淡路に敗走させた。足利義維も父義植以来の将兵数百名に守られて淡路に落ちていった。淡路に渡った晴元は、淡路の細川家の支援を得て、間もなく摂津の池田城に入る。一方、淡路の志築に着いた義維は、管一族の好意を受け、ここで二年近く滞在する。その間、義維は名を義冬と改め、将軍として京都に返り咲く日を待った。天文 3 年(1534 年)、阿波の守護、細川持隆は足利義冬に阿波に来ること

を勧め、大船数隻を送って義冬を阿波に迎え入れた。一行は阿波の那賀川河口の平島庄古津（現在の阿南市那賀川町古津）の港に着いた。当時、古津は那賀川上流の林産物を積み出すための港として開けていた。平島庄は足利尊氏が後醍醐天皇の供養のために建てた京都の天龍寺の荘園であった。義冬一行は上陸すると、平島庄赤池（現在の阿南市那賀川町赤池）の西光寺を訪れ、寺の建物を増築して仮の宿舎とした。義冬に従った者は約360人であった。



写真－3 西光寺の山門(那賀川町赤池)



三好元長(元長)像(見性寺蔵)

写真－4 三好元長の画像

## 7 平島公方の定住

この頃、阿波においては阿波屋形と呼ばれた守護細川持隆が、周囲に堀を巡らせた館（現在の勝瑞館跡）を構え、勢力を誇っていた。持隆の父之持は晴元の父澄元の弟で、持隆は晴元と従兄弟同士であった。之持は晴元をよく援助し、三好元長も庇護した。元長が戦死するとその嫡子まで保護した。持隆もまた父同様に晴元を助け、元長の嫡子を扶育した。三好元長には五人の息子がいた。のちに、長男長慶は畿内で活躍し、実質的な天下の支配者となる。次男義賢（実休）は阿波を統治し、兄長慶を助けて各地を転戦する。三男冬康は安宅家を継承して淡路を治め、強力な海軍力を持つ。四男一存は讃岐の十河家を継いだ。



図－5 勝瑞館及び勝瑞城の位置図



写真－5 発掘が進む勝瑞館跡(藍住町勝瑞)

持隆は阿波平島荘に居を定めた足利義冬に対し、平島 12 カ村（北中島、原、西原、大京原、古津、三栗、赤池、苧屋、工地、上福井と、現在は那賀川河川敷になっている北原、北条）に、那賀山庄地の 4 カ村（吉井、楠根、仁宇、和食）を加えた知行 4 千貫を送った。しかし、これだけでは 360 人もの家臣を養えなかったため、涙を吞んで家臣の約 6 割に暇をつかわし、それぞれの本国へ帰らせた。義冬は藤原清兼の居城であった古津の平島壘を改築して新たな館を建て、西光寺から移り住んだ。屋敷は一辺約 110m で四方に堀を巡らし、那賀川の派川苧屋川から水を引入れた。敷地内は京都の公家屋敷と武家屋敷を兼ね備えた造りとし、義冬の住む本屋、家臣の住宅部屋などが並び、馬場、弓場、花園なども備える広大美しいものであった。義冬は守護細川家からは主家として丁重なる扱いを受けた。平島の住民からは、屋敷は「御所」とか「公方館」と呼ばれ、義冬は「御所さま」とか「公方さま」と呼ばれてあがめられた。義冬は撫養で死別した義父で 10 代将軍足利義植の遺髪を西光寺に葬り、墓石を建てて弔った。現在も西光寺に残る義植の墓である。義冬は細川持隆の薦めで周防の大内義興の娘を妻に迎え、貧しいながら平和な日を送る。そして天文 7 年（1538 年）、長男の義親（のちの 14 代将軍義栄）が生まれる。

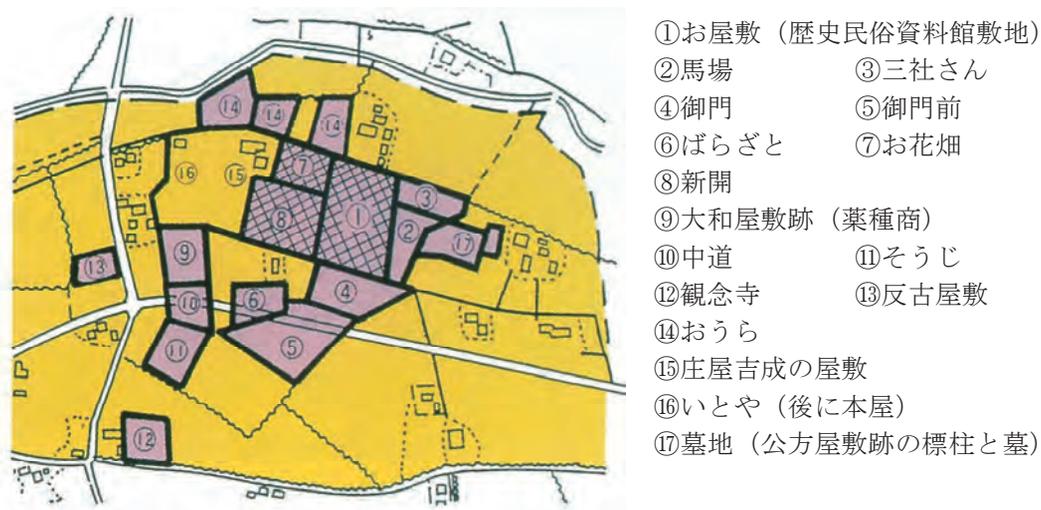


図-7 平島公方屋敷跡再現図



写真-6 平島公方屋敷跡(那賀川町古津)



写真-7 移築された公方館の玄関と書院  
(小松島市小松島町の地藏寺)



写真-8 平島公方墓所



写真-9 初代平島公方義冬らの墓

(いずれも那賀川町赤池の西光寺境内)

一方、成長した三好長慶が畿内で活動するようになると、阿波は弟義賢が三好勢の代表となり、守護細川持隆を助けた。義賢は持隆に従軍して伊予の河野氏や讃岐の安富氏を攻め、長慶を助けるため畿内にも出陣した。しかし、三好一族の長慶と政長の争いにおいて、細川晴元が政長を支援したため、持隆と義賢は不仲となる。そして、足利義維を上洛させようと目論んだ持隆に義賢が反対し、遂に事変が起きる。天文 22 年(1553 年)、勝瑞の見性寺(当時は勝瑞城の西方にあったが江戸時代中期に現在の勝瑞城跡公園内に移転、三好氏の菩提寺である)境内において、三好義賢の家来が細川持隆に襲いかかり、逃げた持隆は寺の奥で自刃する。義賢は、持隆の妾の子である真之を主君に据えるが、実質的には三好が阿波の支配者となった。

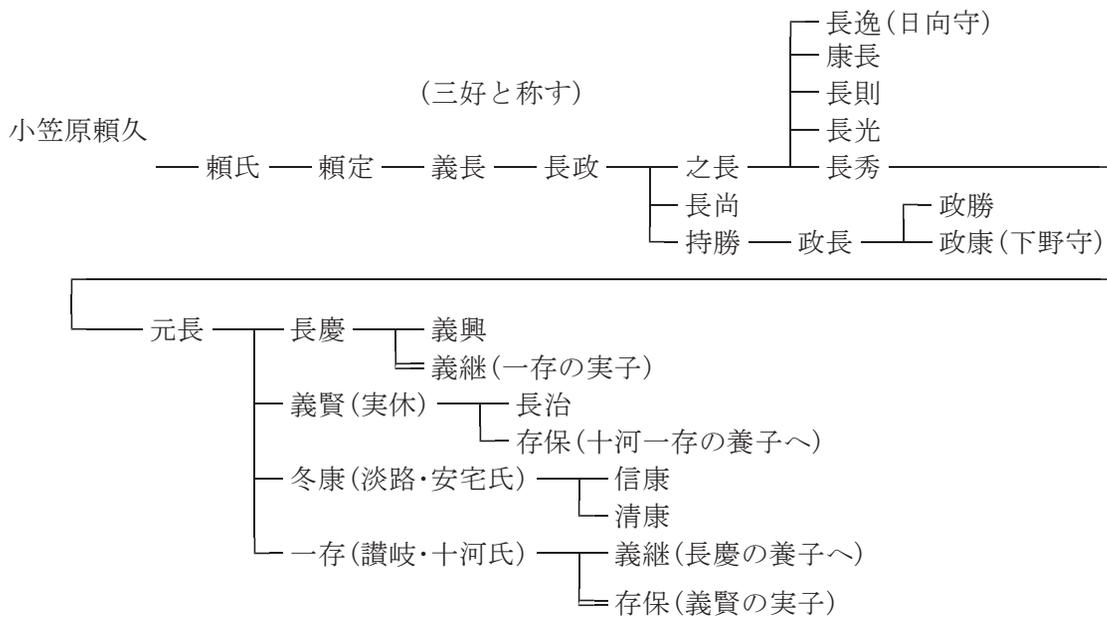


図-4 三好氏系図 (※ — 線は養子)



写真－10 勝瑞城跡と見性寺(藍住町勝瑞)



三好義賢像(妙国寺蔵)(写真は堺市博物館提供)

写真－11 三好義賢の画像

この事変を知った足利義冬は、自分を育て、平島の領地を与え、世に出そうとして命を落とした細川持隆を思い、腹に据えかねていた。翌年、勝瑞城に人質となっていた生母、青雲院が病死したため西光寺に葬り、弘治元年(1554年)、義冬は妻の里である大内義長を頼って、周防へと渡る。足利義冬が引き揚げた後の阿波は、名実ともに三好の天下となる。



図－6 平島公方ゆかりの施設 位置図

## 8 阿波三好の台頭

この間、国内では各地で群雄割拠し、争いを繰り返す戦乱の時代になりつつあった。天文 8 年(1539 年)、三好元長の嫡子長慶が阿波の軍勢を率いて畿内に進出して以後、20 余年間は長慶が畿内で活躍した時代である。天文 15 年(1546 年)、將軍義晴は嫡子<sup>よして</sup>義輝に將軍職を譲り、その 4 年後に近江で亡くなる。在職中は管領の争いによって、たびたび京都を脱出して身を保たねばならない生涯であった。天文 17 年(1548 年)、三好長慶は三好政長を討とうと決意する。政長は元長の戦死後、三好一族中の有力者として細川晴元に信頼されていたが、長慶は政長を一族の統制を乱す者として除こうとする。翌年、両者は摂津の北中島で決戦となり、長慶は政長を討ち取る。しかし、政長を応援していた細川晴元には攻撃を加えず、和泉の細川政賢の嫡子<sup>うじつな</sup>氏綱を擁立して京都に入る。

天文 21 年(1552 年)、三好長慶は 13 代將軍足利義輝を京都に迎え、細川氏綱を管領に据える。一方、若狭に逃れていた細川晴元は京都奪還をあきらめず、將軍義輝に近づいて三好長慶を排除しようとする。それを知った長慶は兵を出して戦おうとするが、義輝はいち早く近江の朽木に逃れ、晴元もこれに従った。この時から 5 年間、將軍義輝は朽木で過ごすことになる。長慶には管領以上の力があり、阿波にいた足利義冬を新たな將軍として擁立することもできた。しかし、將軍義輝や細川晴元は排除せずそのままとし、自らが京都を支配する政権を打ち立てて、事実上の天下人になった。長慶は自己の權益を主張する以外に、こだわりを持たなかったのである。



写真-12 三好長慶生誕地碑（三好市三野町）



写真-13 三好長慶像（大阪府大東市役所）

永禄元年(1558 年)、將軍足利義輝を援助する近江の六角義賢は、三好長慶に講和を持ちかけ、和談が成立した。義輝は帰京し、京都には平和が戻った。ただ、全国的には戦国武将による群雄割拠の時代に入っていた。將軍や幕府は無力化していても、彼らにはその名を利用して大義名分を得る必要があった。そのため、翌年には尾張の織田信長や越後の長尾景虎（のちの上杉謙信）が上洛してくる。当時、三好長慶の勢力は、摂津を中心に山城・丹波・和泉・阿波・淡路・讃岐・播磨にわたり、これと肩を並べる者は全国に見当たらなかった。ところが、長慶は畿内を制圧したとたん武将としての野心を無くし、風流の道に親しむようになる。政治も見ようとはせず、代わって家来の松永久秀が実権を握り、

専横の振る舞いが多くなる。永禄 4 年(1561 年)、將軍義輝の御成を迎えたのが長慶の絶頂であった。その前後わずか 3 年の間に不運が相次ぐ。

永禄 3 年(1560 年)長慶の弟十河一存の落馬による死亡に続き、永禄 5 年(1562 年)、弟の三好義賢が和泉の久米田で流れ矢に当たり戦死する。永禄 6 年(1563 年)は嫡子<sup>よしおき</sup>義興が松永久秀により毒殺され、永禄 7 年(1564 年)には弟の安宅冬康が久秀から「逆心有り」との進言を受けた長慶により殺される。そして、長慶自身も冬康の死後、わずか 2 ヶ月足らずで病死する。長慶の死後は、養子義継が弱年(13 歳)であったため、松永久秀や三好一族(三好三人衆と呼ばれた三好<sup>ながゆき</sup>長逸、三好政康、岩成友通)らが協議して喪を隠し、世間へは病中と伝えて、2 年後の永禄 9 年(1566 年)、長慶の葬儀が営まれた。

長慶の死後、松永秀久の横暴を押さえ、天下の執権を取り戻そうと考えた三好三人衆は、周防の大内家に庇護されている平島公方足利義冬を 14 代將軍に立てようと考えた。永禄 6 年(1563 年)、三好長逸は足利義冬を阿波に呼び戻すべく周防に赴く。義冬は義理ある大内家に帰還の伺いを立てたが反対される。そこで長逸は策を弄して義冬を船に乗せ、そのまま阿波まで連れ帰った。怒った大内家は義冬の家来や家来を周防から出すことを禁じるが、まもなく義冬の妻が亡くなったため、翌年、義冬の次男義助夫婦、三男義任、家来全員が阿波に送り帰された。持ち帰った義冬の妻の遺髪は平島の西光寺に葬られ、その墓石は現存している。

そして、細川管領家の家督争いも終焉を迎える。永禄 6 年、細川晴元が不運な一生を終え、次いで細川氏綱も病死したため、細川管領家は歴史の表舞台から消えることになる。

## 9 平島公方から將軍誕生

三好長慶が世を去ると松永久秀が執権を把握しようとした。永禄 8 年(1565 年)、久秀は長慶の次男で幼年の三好義継をたて、13 代將軍義輝の室町館を攻撃した。義輝を守る少数の將兵は討死、館は焼け落ちて義輝は自害する。僧籍にあった義輝の弟周<sup>しゅうこう</sup>嵩も殺されたが、もう一人の弟覚慶(のちの 15 代將軍<sup>よしあき</sup>義昭)は近江に逃れる。それ以後 3 年間、幕府は將軍が不在の状態となる。

この年から松永久秀と三好三人衆の仲が悪くなり、両者は摂津の堺で戦いを始める。三好義継と三好三人衆は松永勢を破って堺を手中にし、敗れた久秀は信貴城に落ちていく。この知らせは阿波の勝瑞城から平島公方館に届けられた。そして、足利義冬に対し、京都に上り將軍となるよう勧める。ところが、義冬は病のため立つことができず、代理として長男の義親<sup>よしちか</sup>を京都に送ることにした。義親はまず淡路に渡り、西国の諸將に檄を送り協力依頼する。そして永禄 9 年(1566 年)、阿波・淡路の軍勢を率いて兵庫浦(現在の神戸市)に上陸、摂津とその周辺の城を攻め落としながら進攻し、摂津の富田庄の普門寺を臨時の御座所と定めて都の情勢を窺う。翌年、松永久秀にそそのかされて三好義継が寝返ったため、奈良の東大寺において三好三人衆と松永勢は戦闘となり、大仏殿をはじめとする仏閣は焼け落ちてしまう。この年、足利義親は朝廷に征夷大將軍の宣下を請うが、正親町天皇<sup>おうぎまち</sup>

は戦乱の折であるとして許さず、翌年の永禄 11 年(1568 年)になって、義親は征夷大將軍に任ぜられた。義親は名を義榮よしひでと改め、室町幕府 14 代將軍となったのである。

この時、美濃に逃れていた 13 代將軍足利義輝の弟義昭は、尾張の織田信長に救いを求める。信長は義昭を立てて京都に攻め上り、天下を平定しようと近江の六角義賢に同盟を求めるが断られる。信長はすぐさま六角義賢を攻め落とし、その余勢で京都まで攻め入った。京都を守っていた三好勢の重臣篠原長房は、防戦する余裕もないまま堺まで退却し、普門寺で御座していた將軍義榮を淡路に移して再起を期した。義榮は淡路で病を患い、養生のため阿波の撫養に渡る。義榮が病を患っていることが京都に伝わると、織田信長は義榮の死を待たず、永禄 11 年(1568 年)、足利義昭を奏上し 15 代將軍とする。この年、義榮は撫養で亡くなる。義榮の在位はわずか 7 ヶ月で、京都に入ることはなかった。義榮の屍は平島の西光寺に葬られ、墓石は現存している。翌年、阿波にいた三好政康は義榮の弟、義助を將軍に立てようと兵を率いて京都に向かうが、信長軍に破れて野望は達せられなかった。元龜元年(1570 年)頃から將軍義昭と織田信長は不仲になり、義昭は武田信玄らを味方に引入れ、信長を討とうと画策した。元龜 4 年(1573 年)、義昭は信長追討の兵を挙げるが、信長軍に破れ河内に逃れる。これを見た宮中は、義昭に將軍の資格無しとして征夷大將軍の官位を剥奪する。これにより室町幕府は 15 代 239 年間で終わりをつげる。なお、義昭はその後も幕府再興の夢を捨てず、中国の毛利輝元の援助を求めるなど活動を続ける。

## 10 長宗我部の侵攻と三好の没落

天正元年(1573 年)、足利義冬は平島館で不遇の一生を終える。亡骸は西光寺に葬られ、その墓標は今も残っている。義冬の跡を継いだ義助は、二代目当主として約 300 名の家臣とともに平島館に住み、翌年、長男義種よしたねが生まれる。阿波の勝瑞城では国主三好長治ながはる(三好義賢の実子)の重臣篠原長房が、政務をとりながら阿波の將兵を率いてたびたび畿内にも出陣していた。しかし、三好長治は墮落して乱行が多く、忠臣の篠原長房にも謀反の疑いをかけ攻撃をしかける。そのため、長房は居城の上桜城(現在の吉野川市川島町桑村)において非業の死を遂げる。それ以降、三好一族の協力体制は弱体化する。

天正 3 年(1575 年)、土佐の長宗我部元親が阿波の南方から攻め入った。元親は海部城(現在の海陽町奥浦・海部小学校横の山)など海部郡内の城を制圧する。続いて阿南の桑野や西方、那賀の仁宇まで進駐するが、新開実綱(道善入道)が守る牛岐城(現在の阿南市富岡町)は難攻不落であった。この時、元親が陣を構えたのが津乃峰山の陣ヶ丸である。一方で、平島の公方館に対しては挨拶に出向き、足利義助に領分は保証する旨を伝えるなど穏便な態度で接している。元親は四国平定にあたり、足利將軍



写真一 14 上桜城跡(吉野川市川島町)

の旗印が必要と考えたのである。

天正 4 年(1576 年)、三好長治の乱行に愛想をつかした細川真之は、ひそかに勝瑞館を抜け出す。那賀、勝浦の豪族の支援を受け、仁宇城（現在の那賀町和食郷の蛭子神社）に墨を築いて家臣らとともに立て籠もる。天正 5 年(1577 年)、真之を討とうと出陣した三好長治は、家臣に裏切られて敗走し、追い詰められて長原（板野郡松茂町）で自害する。三好一族は長治の弟で讃岐そごうの十河家に養子となっていた十河存保まさやすを後継者とする。難を逃れた真之は茨ヶ岡城（現在の那賀町中山）を築き、阿波細川の復権を目指そうとする。



写真－ 15 仁宇城跡の蛭子神社（那賀町和食郷）



写真－ 16 牛岐城跡の公園(阿南市富岡町)

他方、四国制覇を目指す長宗我部元親は、阿波の西方からも攻め入り、天正 4 年(1578 年)、大西城（現在の三好市池田町ウエノ）を落とす。翌年には白地城（現在の三好市池田町白地）を落とし、ここを拠点に美馬や西讃岐へと勢力を拡大していく。天正 7 年(1579 年)、元親は牛岐城の新開実綱に対し領地を保全すると約束して和議を結ぶ。続いて、一宮城（現在の徳島市一宮町）の一宮成助も元親の軍門に下る。こうして、元親は三好勢の居城勝瑞への包囲網を徐々に狭めていった。天正 10 年(1582 年)、織田信長が本能寺の変で横死すると、元親は十河存保以下の三好勢との決戦を実行に移す。南方から進出した長宗我部勢は、中富川（現在の藍住町東中富、前川と正法寺川を結ぶ旧河道と推測）をはさんで三好勢と対峙する。約 2 万人の大軍を擁する長宗我部軍は、新开実綱や一宮成助らを先鋒とし、激しい攻防の末に三好軍を打ち破る。敗走した三好軍は勝瑞館へと退却、それを追って長宗我部軍は館を包囲する。三好軍は抵抗を続けるが、包囲中に吉野川が洪水氾濫し争いは一時中断する。存保は玉砕覚悟の決戦を挑もうと決意したが、家臣の進言により降伏の誓詞を差し出して勝瑞館を明け渡す。これが「中富川の戦い」である。20 日間の戦闘による死者は両軍併せて約 1,500 人にのぼり、人的被害は阿波国史上最大であった。これにより、織田信長の上洛以降活躍してきた三好勢の主な武将はほとんど戦死してしまった。十河存保は讃岐の虎丸城（現在の東かがわ市主水）へ逃れ、阿波は長宗我部元親の支配するところとなった。翌年、存保の支援要請を受けた豊臣秀吉は、仙谷秀久を援軍として讃岐に送るが、元親は引田の戦い（現在の東かがわ市引田）で仙谷軍を撃破する。天正 12 年(1584 年)、元親は十河氏の本拠地である十河城（現在の高松市十川東町にある称

念寺) を落とすと、十河存保が守る虎丸城を包囲する。糧道を断たれた存保は、二度目となる降伏の誓詞を差し入れて城を明け渡し、備前へと逃げ落ちたと云われる。



写真- 17 丈六寺本堂(左)と徳運院(右) 写真- 18 徳運院の血天井(右上に血手形が残る)  
(徳島市丈六町、右奥の山林には細川氏の墓がある)



図- 7 阿波細川家及び三好一族ゆかりの施設等 位置図

勝利した元親は、和睦に応じた旧三好勢が謀反を起すの恐れ、排除しようとする。丈六

寺（現在の徳島市丈六町）に牛岐城の新開実綱を招いて酒宴を催し、実綱が酔って油断したところを刺客に襲わせ、主従全員を切り殺してしまう。その時に飛び散った血痕の付いた板が、今も残る丈六寺徳運院の血天井である。次いで、一宮城の一宮成助を夷山城（現在の徳島市八万町夷山）に呼び出し、三好康長（三好長慶の叔父で、織田信長の家臣として働いた）に通じたとして襲撃、成助を切腹に追い込んだ。こうして、元親は阿波の有力武将をことごとく殺害し、その勢力を削いだのである。

一方、細川真之が立て籠もる茨ヶ岡城は、中富川の戦いの後、謎の山岳武士団に襲われて落城してしまう。これは、阿波平定を目指す長宗我部元親の戦略だったと考えられる。細川真之を支援して三好勢の勢力を分散させ、三好勢を滅ぼした後は真之が勢力を盛り返さないよう抹殺したのであろう。真之は城に近い八幡原（現在の那賀町和食郷）において自害し、阿波の細川家は絶えてしまう。現地には真之の墓が残されている。しかし、長宗我部が阿波に進出してきても平島公方家に大きな変化はなかった。阿波の三好勢が減んだのち、元親は十河存保が守る東讃岐の虎丸城へ出陣するが、その際、足利義助は家臣を従軍させるなど協力している。平島公方にとって三好一族は、恩のある阿波細川氏を滅亡させた許し難い相手だったのだろう。



写真－19 茨ヶ岡城跡（那賀町和食郷）



写真－20 細川真之の墓(那賀町和食郷)

## 1.1 蜂須賀家と平島公方

この頃、豊臣秀吉は全国を平定しつつあり、四国にも征伐の軍を送ってきた。天正13年（1585年）、長曾我部元親を討つべく、秀吉の弟羽柴秀長を主将に、播磨龍野の領主蜂須賀正勝らの諸将が大軍を率いて上陸してきた。元親はこれを迎え撃ったが戦さは利あらず、まもなく和議を申し入れる。元親は土佐一国のみとされ、蜂須賀正勝の長子家政に阿波一国（17万5千余石）が与えられた。家政は入国すると一宮城（現在の徳島市一宮町西丁）を居城と定め、大改修に着手するが、翌年に



写真－21 一宮城の本丸跡(徳島市一宮町)

は徳島城に本拠を移した。

家政は豪族が持つ領地は全て取り上げて、旧勢力の細川・三好一族の台頭を制する手段をとった。このため、阿波藩士 2,006 家のなかに細川、三好の姓は見当たらない。阿波の西方には糸田川という姓があるが、これは藩の制圧を逃れるため細川の「細」を「糸田」に分解したと伝えられている。家政は平島館の足利義助に対し、「阿波国内の知行は全て蜂須賀のもので、公方家の知行も藩が預かる。公方家は古津の屋敷回りの土地と、茶湯料として百石を給す。」と申し渡した。足利義助はこの冷遇に立腹し、一度は差し戻したものの、他国への退去を封じられたため、仕方なく百石の知行を受ける。しかし、わずか百石のみでは家来や使用人は養えず、やむなく暇を取らせたが、多くは館周辺に住み着き細々と生活を続けた。文禄元年(1592 年)、義助は病気により亡くなり西光寺に葬られる。藩は後継者となった長男義種に対しても、従来どおり百石を与えると告げている。

慶長 5 年(1600 年)、関ヶ原の戦いが起きる。蜂須賀家政は尾張の野盗から身を起し、豊臣秀吉に従って大名にまでなった身だが、徳川方が有利と見るや剃髪して蓬庵ほうあんと称し、長男の至鎮よししげに家督を譲って徳川方に従軍させる。関ヶ原の戦いで勝利した至鎮は、平島公方 4 代目の足利義次(義種の子)に対し改名するよう申しつける。姓は居住地をとって「平島」、名は足利尊氏の又太郎をもらって「又八郎」とさせる。これによって平島公方は室町幕府の将軍からただの平藩士に降格となり、一方で関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、慶長 8 年(1603 年)に征夷大將軍となり、徳川幕府を創設するのである。

慶長 19 年(1614 年)、豊臣秀頼の家老大野修理の家来が公方館に書状を持参した。徳川家康に対し戦いを起すので大阪城に来て協力して欲しい旨の申し入れであった。家康を討つために足利將軍の旗印が欲しかったのであろう。しかし、面会した足利義次は、今は蜂須賀公の世話になっている身であるとして、藩主至鎮にその書状を差し出してしまふ。さらに、大阪冬の陣では、いっしょに出陣したいと申し出るがかなわず、渭津城(現在の徳島市寺島本町の徳島城跡)の見廻り役に止め置かれた。元和元年(1615 年)、大坂夏の陣によって豊臣家は滅ぶが、この時も渭津城の留守居役をさせられている。蜂須賀家は戦功により淡路 7 万 8 千石が加増され、25 万石となった。慶安 3 年(1650 年)、3 代藩主蜂須賀忠秀は、細川・三好時代からの阿波武士の残党が不穏な動きをしないよう、土地を与えて開墾させて士族扱にする「原土」制度を設けた。同時に、その勢力が拡大しないよう土地の広さを制限したため、人数は 50 名余にとどまっている。

## 1.2 平島公方の困窮

平島又八郎(四代義次)には面白い話が伝わっている。館のすす払いの際、床下に蛇やまむしがたくさん死んでいた。これが「足利將軍家の威光に怖れて毒蛇が死んだからだ」と伝わるようになり、庶民は「まむしよけ」の守り札を公方家に受けに来るようになった。守り札を軸物として床の間に吊して毒蛇を防ぐ家もあり、今でも県下にはこの軸物が伝わる家がある。禄を減ぜられた公方家にとって守り札は貴重な財源だった。

大阪夏の陣以降、平島又八郎は藩に対し帰順の態度を示してきたため、藩内には知行を増やしてもよいのでは、との意見もあったが、歴代の藩主は初代家政の「足利家という由緒ある者に高禄を与えて上席に置いては後々まで悩みの種になるであろう」との遺言を固く守った。平島の公方館も没収しようと考え、徳島城下の幟町3丁目に藩宅を与えた。しかし、公方家はこれを徳島における宿泊所としか扱わなかった。この藩宅に出入りする公方家の家臣達は、無位無官にもかかわらず大納言の服装だったため、世間はこの屋敷を装束屋敷と呼んでいた。彼らは細川・三好時代からの公家侍の格式と誇りを捨てず、決して阿波の藩士とは縁組みしなかった。藩の侍に対しても、野武士上がりとさげすみ、道で出会っても譲ろうとしなかったため、刀を抜いて果たし合いになることがあった。

しかし、藩の冷遇によって公方家は次第に困窮し、旧領の住民にたびたび援助米の寄付を求めるようになる。貧乏のあまり、五代義景よしかげ、六代義辰よしとき、七代義武よしたけの代には公方家慣習の公家や豪族との縁組みが出来ず、正室がいなかった。八代義宣よしのりになるといよいよ困窮し、つながりのあった宮家を通じ、11代藩主重喜しげよしに増棒を要請したが聞き入れられなかった。そのため、義宣は阿波を退去しようとしてまで考えたが、藩の家老稲田植久の尽力により一時金が給付されたため、阿波に踏みとどまっている。

八代義宣は学問を好み、「博山」と号して詩文が得意であった。京都より儒学者の島津華山を招いて屋敷内に住まわせ、その住居は「栖龍閣」と呼ばれた。華山は若狭国の出身であり、幼くして孤児になったため医師に引き取られて医術を学んだが、後に儒学を修めている。華山は公方一族、家臣、付近の同好者の師となつて多くの弟子を輩出した。真行寺（那賀川町今津浦）の住職もその一人であり、その縁で公方屋敷が解体された際、屋敷の側門が移されている。当時、栖龍閣は阿波南方における漢文学の中心地であった。九代義根よしもとも華山を師とし、漢文学に優れた才能を表わした。華山の養子朝彦梁も義根に仕え、義根の詩を「栖龍閣詩集」として編さんした。この詩集は現在、国会図書館に蔵書されている。



写真-22 島津華山の墓(那賀川町中塚の須賀庵)

### 1.3 平島公方の阿波退去

文化2年(1805年)、平島公方九代の足利義根よしもと(平島熊八郎)は阿波を退去する決意を固める。藩主重喜の冷遇に対する不平不満が爆発した義根は、藩主に対し退出届けを提出する。この許可は下りず、出国は差し止められるが、「健康優れず病気保養のため一時出国願いたい」と病気保養を理由に再び申し入れをする。義根の意志が固いのを察した藩は、国外退去を認めるが、随行者は足利家の旧臣だけに限定した。足利義根ほか272名の者は10隻の帆船に家財道具を積み、中島港を離れ新天地を求めて去った。阿波における平島公方の歴史はこれで終わる。

義根一行は紀州（和歌山）の大崎港に入港し、さらに和泉（大阪府）の谷川港へと入港し、陸路で泉州の山中（天領）に移動する。その間、紀州藩と実子<sup>よしひろ</sup>義寛の仕官について交渉をしている。紀州藩は徳川御三家といえども独断で召し抱えることはできず、幕府に伺いを立てるが許可は下りなかったため、代わりに生活費を支給することとした。山中を発った義根は駕籠で大阪に着き、船で淀川を上って鳥羽から陸路で京都に入った。義根一行は足利家歴代の菩提寺である等持院を宿舎と定めるが、後に功運院と正受院を宿舎と定めて移っていく。その後、義根は北野七本末の崇禅寺に移り、姓も元の足利に戻した。しかし、一緒に引き揚げてきた家臣達は京都での生活に困窮し、縁者や職を求めてほとんどが離散していった。義根は紀州藩や足利ゆかりの持院からの援助で細々と食いつないでいたが、文政 9 年(1828 年)に亡くなる。子の義寛は公家の桜井家に仕えたといわれ、その子孫は現在も京都に住んでいる。

#### 1 4 平島公方の遺跡

公方一行が阿波を去った翌年、藩は厄介者払いをするがごとく、平島の公方館を跡形もなく取り払った。本宅は板野郡板野町川端の妙薬寺の本堂に移して改造されたが、その後火災により失われた。しかし、館の玄関と書院は文化 3 年(1806 年)、小松島市小松島町の地蔵寺に移転（寺が購入）され、現存している。当時の公方家の威光がしのばれる豪華な造りであり、県の文化財に指定されている。阿南市長生町西方の吉祥庵（現在は吉祥寺）は平島公方の隠居所であり、山門は公方屋敷の花垣門（花畑入口の門）を移したものである。本堂正面には九代平島公方義根が書いた立派な額が掛っていて、公方家歴代 19 名の戒名を一枚板に刻んだ日牌も残されている。



写真－ 23 移築された公方屋敷の花垣門  
(阿南市長生町の吉祥寺山門)



写真－ 24 九代平島公方義根書の額  
(阿南市長生町の吉祥寺)

阿南市那賀川町今津の信行寺の山門は公方屋敷の側門を移したもので、当時の造りそのままである。阿南市那賀川町古津にある古津八幡神社（三社神社）は、初代公方義冬が屋敷の東北隅に鎮守の神として祀っていたもので、明治 11 年に現在の場所に移された。境内には義冬が建立した 3 基の鳥居と石灯籠が残っている。



写真－ 25 移築された公方屋敷の側門  
(那賀川町今津浦の真行寺山門)



写真－ 26 公方屋敷にあった鳥居と石灯籠  
(那賀川町古津の八幡神社)

那賀川町三栗の三栗八幡社境内には、七代公方義武建立の石灯籠 2 基があり、那賀川町敷地の万願寺にも八代公方義宣が建立した石灯籠がある。そのほか、阿南市那賀川町中島の下庵には、公方屋敷が解体されて船で搬出する際、積み残された材料で造った門があった。最近になって門は修築され、当時の梁 2 本のみが再利用されて残っている。



写真－ 27 七代平島公方義武建立の灯籠  
(那賀川町三栗の八幡神社)



写真－ 28 八代平島公方義宣建立の灯籠  
(那賀川町敷地の万願寺)

阿南市那賀川町赤池の西光寺には、山門を入ると左側に十代將軍足利義植、初代平島公方足利義冬、十四代將軍足利義栄の墓が並んであり、右手奥には平島公方歴代の墓が残っている。全部で 23 基の墓があるが、寺の火災で古文書や過去帳が焼失し、現在判明しているのは白い標柱が建てられている 14 基のみである。家臣の墓も一部残っているが、多くは無縁仏として門前の通路脇に並べられている。また、阿南市那賀川町中塚の須賀庵には島津華山の墓があり、彼の功績をたたえる九代公方義根の碑文と、弟義恭の書が刻まれている。すぐ隣には義根が出国する際、藩から同行を許されずに割腹自殺した忠臣、富山長左衛門の墓がある。



写真－29 平島公方一族の墓①



写真－30 平島公方一族の墓②

(いずれも那賀川町赤池の西光寺)

平島公方屋敷跡は阿南市那賀川町古津にある。江戸時代に整地されて水田となったが、整地の際に不要になった残土が小さな丘として残っている。そこに、国土地理院の三角点が設置されて、現在はその隣に「公方屋敷跡」の標柱が建てられている。敷地内には不動尊と数個の墓石が残っていて、その北側には屋敷を囲っていた堀の一部と思われる用水路がある。水田を挟んだ西側には歴史民俗資料館があり、足利氏関係の資料が展示されている。



写真－31 歴史民俗資料館(那賀川町古津)

一方、徳島市丈六町にある丈六寺は、阿波国守護細川家の菩提寺として細川家によって保護されてきた。寺の観音座像を立像にすると一丈六尺になるため、これが寺の名前になった。観音堂は細川真之が寄進建立したもので、宝物館には細川成之の像があり、いずれも重要文化財に指定されている。本堂右奥の山にある墓地には、左から細川持隆、成之、真之らの墓が並んでいる。丈六寺は蜂須賀家が徳島藩主になっても保護は続き、寺領 200石が給されてきた。また、三好一族の墓は藍住町勝瑞にある勝瑞城跡の見性寺境内にあり、向かって右から之長、元長、義賢、長治と4基が並んでいる。

室町時代の天下人ともいえる足利、細川、三好一族の墓は、予想よりもはるかに小さいのに驚く。おそらく質素で厳しい暮らしだったのだろう。同時に、平島公方ゆかりの遺跡が各所に残されていて、地域や庶民との関わりが深かったこともうかがえる。移転後もなお現存する建物や山門などからは、当時の威光が偲ばれるが、これらのほとんどは文化財でない。このため、老朽化して壊れかけていたり、手を加えて改造されているのは残念である。各地に残る平島公方の遺跡が、健全な状態で後世に引き継がれることを願ってやまない。



写真－32 三好氏の墓(藍住町勝瑞の見性寺境内)



写真－ 33 丈六寺裏山の細川氏の墓



写真－ 34 細川真之が寄進した観音堂

(いずれも徳島市丈六町の丈六寺)

## 1 5 阿波の歴史への影響

豊臣秀吉が蜂須賀家に阿波一国を任せたのは、阿波が畿内に影響を及ぼす重要な地域だったからである。蜂須賀家は豊臣家の家来であったが、元は尾張の野盗であり、先祖や家系には縁がなかった。そのため、足利一族はじめ細川や三好一族など由緒ある源氏一族のもつ求心力や統率力に脅威をもち、再び台頭することのないよう徹底して弾圧を加えている。しかも、関ヶ原の戦いでは徳川方が有利とみるや、豊臣家への恩義を捨てて徳川方に寝返り、その功績として淡路が加増されている。この頃の蜂須賀家は時代を先読みする力があつた。

しかし、幕末において蜂須賀家は濃厚な佐幕派となり、改革の動きはまったく起きなかつた。逆に、明治2年版籍奉還が行われた際、庚午の事変（稲田騒動）と呼ばれる次元の低い内輪もめを起した。家臣の稲田家が「蜂須賀家とは対等であつた」として分藩運動を起し、これに腹を立てた蜂須賀家の家臣が淡路の洲本にあつた稲田屋敷を襲撃したのである。その結果、蜂須賀家の首謀者は日本史上最後の切腹刑となり、稲田家が城代を務めていた淡路島は兵庫県へ編入されてしまった。また、蜂須賀家は藩所有の山林のほとんどを県外の商家に売却して換金したため、県内には高知県のように広大な国有林がほとんどないのである。明治維新における徳島藩には、「改革」とか「日本のため」といった意識は全く芽生えなかつた。ひたすら保身に終始したため、結果として徳島県に大きな損失を与えたのである。その要因として、平島公方をはじめ阿波細川や三好の一族を徹底的に弾圧し、決して家臣に加えなかつたことが挙げられる。組織や体制を守ることに固執したため、個人を尊重する気風が芽生えず、自由民権運動が起こる土壌ではなかつたのである。そのため、幕末において薩長土肥のような、藩の改革や時代を動かす有能な人材が出てこなかつた。そして、その影響は今日にまで及んでいるといつても過言ではないだろう。

余談になるが、徳島市佐古山町諏訪山には 10 代藩主重喜が造成した広大で立派な儒式の墓地がある。この墓地は国の史跡に指定されたのを期に、徳島市が万年山墓所として蜂須賀家に代わり管理している。明治維新において「日本や徳島のため」との概念がなかった蜂須賀家の墓を、徳島県民の血税で維持管理しているのは皮肉な話である。



写真－ 35 万年山墓所(徳島市佐古山町)

## 16 おわりに

最近、畿内では三好長慶の存在がクローズアップされ話題となっている。三好長慶が晩年を過ごした飯盛城のある大阪府大東市では、2017 年 10 月に三好長慶の銅像が市役所正面に設置され、長慶には特別住民票が交付されている。NHKの大河ドラマにも取り上げてもらおうとポスターも作成されるなど、歴史を生かしたまちづくりが着々と進められている。ところが、肝心の三好長慶出身地である徳島県において、足利氏、細川氏、三好氏への関心が薄いのはどうしたことだろう。室町時代は阿波が天下を治めた時期で、徳島県民が誇れる時代である。阿波に足利一門が 270 年にわたり在住し、それを支えた細川氏や三好氏に対する県民の認知度が低いのはもったいない話である。平島公方ゆかりの地である旧那賀川町は市町合併によって阿南市に編入され、その歴史や文化に対する取組みが疎遠になっている。地元住民の盛り上がりも乏しく、せっきくの歴史民俗資料館は訪れる人もなく閑古鳥が鳴いている。

近年、室町時代の阿波守護細川氏や三好氏が本拠地とした勝瑞館跡が発掘され、壕、庭園、建物跡や多数の土器、陶磁器類が出土した。これにより、従来の勝瑞城跡は三好氏が長宗我部の侵攻に対し築城した砦であって、勝瑞館は県道を挟んだ南側の広大な土地にあったことが判明している。今後、さらに事実が明らかにされるだろう。また、平成 30 年には「全国足利ゆかりの会」の総会が阿南市那賀川町で開かれ、足利家 28 代当主の足利義弘氏をはじめ全国 8 府県から 62 名が出席している。ぜひ、このような機会を捉え、地域おこしなどのテーマとして積極的に活用して欲しいものだ。そのためには、行政の先導とそれに住民が連動していく仕組みが不可欠と考える。地方の予算が厳しいのはどこも同じである。まずは地元阿南市が知恵を出し、工夫し、汗をかくことが重要であろう。そして、平島公方屋敷跡についても埋蔵文化財の調査が行われ、事実関係がより明らかにされることを願ってやまない。

以上

《参考文献等》

「平島公方物語」 中島 源 著 阿南市文化振興課 発行

「三好長慶」 長江正一 著 吉川弘文館 発行

「元親記」 泉 淳 著 勉誠社 発行

「国指定史跡「勝瑞城館跡」」 藍住町教育委員会社会教育課 発行

那賀川歴史文化紀行ガイドブック 国土交通省那賀川工事事務所 発行

大阪府大東市ホームページ

徳島市観光課ホームページ